鹿大演研報（Res. Bull. Kagoshima Univ. For.），27：31-32，1999

絶滅したと考えられていたハツシマラン（ラン科）の再発見

馬 田 英 隆[1]・横 田 昌 嗣[2]・前 田 利 盛[1]
1） 鹿児島大学農学部附属演習林
2） 琉球大学理学部海洋自然科学科

Rediscovery of *Odontochilus hatusimanus* (Orchidaceae) Regarded as Extinct

Hidetaka UMATA[1], Masatsugu YOKOTA[2] and Toshimori MAEDA[1]
1) University Forests, Faculty of Agriculture, Kagoshima University, 21-24, Korimoto 1-chome, Kagoshima 890-0065
2) Department of Chemistry, Biology and Marine Science, College of Science, University of the Ryukyus, Nishihara, Okinawa 903-0213

An intensive search for *Odontochilus hatusimanus* (Orchidaceae) which has been regarded as extinct was made in the Ohsumi peninsula of Southern Japan. A small number of orchids of this species were discovered in the natural forest of 60-80 years old ever-green broad-leaved trees. Those orchids formed very few and small groups. This species is suggested to be in an endangered situation.

Key words : endangered plant species, extinct plant species, *Odontochilus hatusimanus*, Orchidaceae
キーワード：絶滅種，絶滅危惧種，ハツシマラン，ラン科

ハツシマラン *(Odontochilus hatusimanus)* はラン科 *(Orchidaceae)* イナバラン属 *(Odontochilus)* の種で，その和名および種小名は，琉球列島の植物相の研究に貢献した本学名誉教授初島住彦博士を記念している[1]．

ハツシマランは次のような生態的特徴を有している[2]．(1)イナバラン属の中では最北に分布し，常緑広葉樹林に発生する．(2)生息分布が極端に限られ，わが国の鹿児島県の一部[3]と大分県の一部[4]にのみその生息が確認されている．(3)常緑の多年草であるが個体数が極端に少ない（本植物が他の多くのランのように，蒐集家あるいは好事家の乱獲によって稀少化したということは聞いたことがない）．

以上のような生態的特徴は，ハツシマランが種の分布と進化に関する研究において，また菌根共生などの生理・生態学的な研究において，非常に興味ある研究材料になり得ることを示唆している．さらに，近年多くのラン科植物が乱獲以外にも人間の森林攪乱によって衰退の一途をたどっているが，ハツシマランのような特異な生態的特質を有するランについての研究は，生物多様性の維持と増進をはかるという視点からの森林管理のあり方に貴重な知見を与えることも予想される．

ハツシマランは元来稀産種[1,2]として知られていたが，近年本植物の発見の報告が無いことから，すでに絶滅したものと見なされ，近々絶滅種としてレッドデータブックに登載されることになっていた．そこで，筆者らは本植物の絶滅有無の確認をするために，その生息調査を1998年7月と1999年6，7月に鹿児島県大隅半島で広範かつ詳細に行った．その結果，60～80年生の天然常緑広葉樹林内で，数個の花序を付けた植物体（Fig. 1）と，まだ花序を付けるに至らない40～50個の小植物体をかろうじて発見することができた．ハツシマランは10個体前後からなる小さなグループを作っていたが，グループ数は僅かで数個しかないことが観察された．

以上のようにハツシマランは幸いにも絶滅を免れていたことが判明した．しかし，ハツシマランの生息個体数が非常に少ないこと，開花個体数が僅か4～5個しか観察されなかったこと（そのうち2個は花序が未成熟のまま枯死していた．）などから，稔性のある種子が生産されるかどうかも危ぶまれた．このような観察結果に基づき，筆者らはハツシマランを絶滅危惧種として取り扱うべきだと提案したい．

本報告では，筆者らはハツシマランが置かれている危機

的な現況に鑑み，生息場所についての詳細な情報公開は行うべきでないと判断し，本植物を発見したという事実のみを記することにした．

引用文献

1)　前川文夫：原色日本のラン，p.280，誠文堂新光社，1971
2)　佐竹義輔　他：日本の野生植物　I（草本），p.213-214，平凡社，1982
3)　初島住彦　編：改訂鹿児島県植物目録，p.234，鹿児島植物同好会，1986
4)　初島住彦：私信

要　約

絶滅したと考えられていたハツシマラン（ラン科）の生息調査を鹿児島県の大隅半島で行った．その結果，少数ではあるが60～80年生の天然常緑広葉樹林で生育しているのを発見した．ハツシマランは10個体前後からなる小さなグループを成していたが，そのグループ数はごく僅かであった．ハツシマランは絶滅の恐れがあると考えられる．

Fig. 1 Infloresecence of *Odontochilus hatusimanus* (23 July 1999).